

B—37 皮革の染色性とそのクリーニングの研究 (第1報) 皮革の捺染

東京家政大短大 ○ト部 澄子
堀尾 博子
松井 正子
本田 悦子

1. 被服材料として使用される布の染色の加工は、無地染（浸染）と各種模様染（捺染）に大別される。皮革は手工芸染法で多くの模様づけが行なわれているが、皮の衣料の模様染は見当らない。本研究は皮の染色性を考察して、皮に一般被服材料と同様な捺染法が可能か否かの研究を行なった。第1報は主として、皮革の捺染の最も基礎的な試験研究結果の報告を行なう。

2. 研究材料にはcalfのクロム鞣し皮を使用し、皮革に適する染料のうち、まず酸性染料（外国及国産染料）を選んだ。捺染糊料として、代表的な4種（C. M. C., アルギン酸ソーダ, トラガントゴム, 友禅糊）を用い、これらの色糊の特徴をとらえ、色糊の濃度、添加助剤の検討、熱処理の温湿度などを考慮して、染着された皮の染料の滲透状態、堅ろう度、その他を比較検討した。

3. 皮革の染色は、次の諸点に問題がある。
即ち ①なめし方により染色法が異り、なめし色が残って、淡色、鮮明色が難かしい。②皮の部位により染料の親和力が異なる。③布と違い厚みがあり不定形である。④皮は高温で損傷される。など、今後この性質と捺染との関係は多くの問題があるが、本研究では各糊料はそれぞれ特徴があり捺染は可能であった。最も適当な糊料は、アルギン酸ソーダ、トラガントゴム糊で、助剤にチオ尿素及尿素を添加すれば、各糊料中の染料は、殆ど皮の内部まで移染する。